澄川　喜一（名誉教授）

　昭和42年、講師として藝大に奉職した時、「藝大に務めたら、いい先生になろうなどと思うなよ、彫刻家としての姿勢をもち続けろ。学生はその生き様をよく見ているぞ」、と先輩の教授から云われた。

　藝大にはコーチ専門の人はいらない、活躍中の現役のアーチストが必要であることと、同時に藝術家としてめしを食う厳しさを学生に見せることなのだろう。

　藝大では、仕事をして見せることが、百の教義より遙かに優ることなのである。

　真の藝術家は、真の教育者と云われる所以である。藝大に奉職し、永年有形無形の多大な恩恵をいただいたお陰で彫刻家の端くれとして生きてこられた。退官に当り数冊の資料を収めさせていただいたが、真の藝術家であり真の教育者であったかどうか、自信は全く無い。あるのは永年に渡ってお世話になった感謝の気持ちだけである。何かのお役に立てれば幸せである。

（2002年11月　教官アーカイヴ展に寄せて）